
Elona×ポケモン（改訂版）

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E l o n a × ポケモン (改訂版)

【Nコード】

N 1 2 3 3 Y

【作者名】

大豆

【あらすじ】

あだ名がレッドの少年は、祖父の改造したゲームのテストプレイを頼まれる。ポケモンをベースにしたヴァーチャルリアリティゲームだということで楽しみにしていたのだが、入ってみればそこにはカオスな世界が広がっていた。レッドは戸惑いながらも、ゲームクリアを目指して旅に出る。

※「E l o n a × ポケモン イロモン」の改訂版です。ポケモン初代とE l o n a を知らない人には意味不明な単語が出てくる可能性があります。

プロローグ

レッドは困っていた。レッドというのは由来も思い出せない彼のあだ名で、本名はもちろん違うがそれはさて置き。

レッドはとても学生らしい問題に直面していた。

高校生になって最初の中間考査が明日に迫っているのだ。しかし彼はまるで勉強をしていない。嫌なことを後回しにし過ぎてこんな感じになった。

このままでは悲惨な点数になることが簡単に想像できる。それはすなわちお小遣いが半分になるということだ。

どうにかしたいのだが現実はいつも厳しい。時が刻々と過ぎていくのを感じつつ、教科書にかじりついて悪あがきをしている最中だった。

レッドが居るのは祖父の研究所であった。

祖父は凡才だが興味と根気が並はずれている類の人間だった。若い頃に稼いだ金を使って、今は研究所と称した一軒家で怪しげなことをやっている。

研究所には新旧入り混じった様々なゲームの筐体とソフトが置いてあるのでレッドのお気に入り場所だった。最近ハマっているのは15年前に発売が中止された任天堂64である。荒いポリゴンが逆に新鮮だった。

研究所のソファで落ち込んでいるレッドの後ろを、「入室禁止」と書かれたプレートがかかっている部屋から出てきた祖父が通りかかった。孫がゲームを起動していないどころか勉強をしているという珍事に、祖父は驚く。

「どうしたレッド。ゲームに飽きたのか？」

「それはない。それはないよお爺ちゃん。僕だって時には勉強するってことだけだよ」

レッドの反論に、老人は安堵のため息を吐き、豊かな顎鬚を揺らした。

「それは良かった。レッドには是非テストプレイを頼みたいゲームがあるのだ」

「え」

「さっき完成したばかりでな。やってくれるか？」

その言葉にレッドは顕著に反応した。

祖父はゲームを改造することがたまにあった。その中にはたまにとっても面白いものがあるのだ。恐らく変態的に細部まで作りこむことがその要因だろう。

しかも今回、祖父は長い間入室禁止の研究室に籠っていた。ヴァーチャルリアリティゲームを改造している、との言質もとってある。つまりレッドはとても期待していたのだ。

やりたい。レッドのペンを持つ手が止まった。

しかしテストが！ レッドの理性が叫ぶ。そこに祖父が悪魔の言葉を囁いた。

「それほど長くはかからん。夕飯までには終わるだろう。何せ――

「ほ、本当に！？ やります！」

祖父に最後まで言わせず、レッドは飛び上がった。そう、勉強など夕飯の後でもできるではないか。

レッドは割とダメな高校一年生だった。

「そうか。では頼むでしょう」

祖父に連れられ入室禁止の部屋に入り、VRゲーム用の半透明の楕円球体、いわゆるポットにレッドは横たわる。

「今度は何のゲームなの」

「ポケモンの初代と他のゲームを混ぜた。恐らくお前は知らないゲームだ」

「ポケモン？ それって夕飯までに終わらないんじゃない？」

現在の時刻は15…12。ポケモンはそんなに早くクリアできるゲームじゃない。祖父は分かっているという風にうなずいた。

「問題ない。中の時間は9000倍に加速される。一年過ごしてようやく一時間ほどだな」

「あの…僕が廃人になりそうです」

VRゲームのソフトだけでなく筐体にも手を加えているらしい。

「私も中で2年ほど過ごしてみたが、この通り問題はない。身体能

力が変化するゲームではないからな。クリアした後出れるようにしておくから、楽しんでこい」

クリアに手間取ったら精神的に老けそうである。クリアする前に強制的に止めさせられるよりはましだろうか。

ポットの中が暗転し、レッドの首筋に電極が触れる。レッドの意識は暗転した。

「うう…」

そして目覚める。見慣れない部屋。柔らかいベッドに横たわっていたようだ。頭には野球帽を被っていた。

ここはもうヴァーチャルの世界なのだろう。しかし見分けが全くつかない。窓から見える空や森、レッドの体にもまるで違和感がなかった。

脳内でシステムメッセージが聞こえてくる。

【『ポケモン×E10na』の世界へようこそ。初めに名前を教え

ていた……失礼、すでに入力されておりました。レッド様ですね】

それ僕にあだ名だよねいちゃん、とレッドは思った。

第一話 少女はアピールした

何かを確認するように、システムメッセージは繰り返す。レッドが返事をしなかったからだろうか。

【Elona×ポケモンの世界へようこそレッド様】

「あ、はい」

それにしても……Elonaか。不思議な響きだ。祖父の言うとおりに、聞いたことのないゲームだ。

【この世界についての説明をお聞きになりますか？】

「あ、お願いします」

むしろ聞かないのはありえないだろう。フンドシー丁で砂漠横断に行くようなものだ。

【承りました。それでは説明させていただきます。以下の内容は、メニュー画面のヘルプより同じものがご覧になれますので、是非ご利用ください】

メニューを開くよう頭の中で念じると目の前に透き通った青いウィンドウが展開される。移動中など、かなり視界の邪魔になることが予想される位置だ。メニューを開くときは立ち止まる必要がらう。指で触り、『ヘルプ』を開く。それを待っていたかのようにメッセージが流れだした。

【この世界は初代ポケモンですが、Elonaのゲームのキャラクターも存在しております。モンスターも同様です。また、Elonaの設定通り

、ほとんどの生物をモンスターボールで捕獲可能です。これに伴い、ほとんどの生物にポケモンタイプが設定されております】

「ほとんどの生物っていうと……ないとおもうけど人間も？」

【人間であろうと、生物には変わりありません。よって質問の答えはYESです】

「YESなの!？」

Elonaってすごいゲームだな……とレッドは戦慄する。

ヘルプには但し書きで、「トレーナー戦中に、相手のモンスターを捕まえることはできません」とある。わざわざ注意することではないような気がするが、初めてポケモンをしたときにジムリーダー戦でモンスターボールを投げたことが思い出され、レッドは懐かしくなっ

た。

システムメッセージはこの世界の注意点を喋り続ける。

睡眠や食事は必要だが、排せつはしなくていいこと。汗は出るが、蒸発すると臭いや垢は残らず、体は清潔に保たれること。外部から汚れをつけられない限り、風呂に入る必要は基本的にないこと。このあたりの配慮は非常に助かる。

ボールでゲットした生物はトレーナーに服従し、死んでもポケモンセンターに行けば元気なモンスターにまた会える。手持ちのモンスターが全滅すれば、レッドは強制的にポケモンセンターへ転移させられる。

また、驚くことにトレーナーといえどもダメージを受ければ死ぬらしい。死ぬといっても疑似的な死で、デスゲームではないようだが。

死んだ場合はポケモンと同じくポケモンセンターで復活する。ペナルティは所持金の半分を喪失。ランダムに所持アイテムが失われることもある。

【レッド様の腕に嵌まっている腕輪がトレーナーの証です。それを見たモンスターは好戦的になり、またトレーナーは腕試しに戦いを仕掛けてくることでしょう。壊すこと、外すことはできませんし、覆い隠しても覆い隠したものの上に転移します。】
「へえ…」

諸注意を語り続ける声は、ずいぶんと人間らしかった。ニュースキヤスターのお姉さんを彷彿とさせる声だ。
最近のAIの発展は人間に追いついたという見解もあるほどである。学習によって自我を持つと、人間との見分けがつかなくなる。
その技術はVR内のNPCにもいかなく発揮される。祖父の作りこみ方は尋常ではないので、きっと人間と変わりのないNPCが出てくるに違

いない。

所詮ゲームのキャラだと侮っていれば、痛い目にあうだろう。それはVRゲームをするうえでの鉄則だ。

【最後に、鞆について説明します。現在学習机の上にある鞆は外のあらゆる刺激から、中の物を守ります。容積は無限で、重量は軽減されます。軽減されても重いと感じるようなら、モンスターに運ばせるなどしてください】

——レッド、いつまで寝てるのー？ 今日はおーキド博士に呼ばれてるんでしょー？

システムメッセージが喋り終わると、部屋の扉の外、恐らくは階下から女性の声がした。主人公の母の声だろう。レッドは立ち上がり、部屋を出る。

おっとその前にパソコンの中の『きずぐすり』を取らないとね。

「おお、待っておったぞレッド君」

レッドを出迎えた白髪の老人、おーキド博士は、おおらかな笑顔で奥へと通してくれた。初代のストーリーは、確か草むらに入ろうとしておーキドに怒られることから始まったと思うのだが、このゲーム

ではその辺が略されているようだ。

オーキド博士の研究所は、外観の割には意外と狭い。物が多いからそう感じるのかもしれない。

色々な計器が乱立している中を通って奥へと進むと、人影がある。前髪がスネオのように重力に逆らった同い年くらいの少年だった。

レッドと同じ年なので、高校生くらいである。レッドと同じく、運動はあまり得意そうでない。

【この少年は、ライバルキャラのグリーンです】

「おそかったなレッド」

システムメッセージが教えてくれた。グリーンは事あることに突っかかって来そうなオーラを出していた。

腕を組んでこちらを見ているグリーンの傍らには、モンスターボールが置いてあった。

近くに行ってみると上の赤い部分が透けており、中に入っているモンスターが確認できる。

生ポケモンを初めて見たわけだが、食玩くらいの大きさに縮んでいるので感動はなかった。

ボールの中にはポケモンの原作通り、ヒトカゲ、フシギダネ、ゼニガメ、そして金髪の少女がそれぞれ入っていた。

「ん？」

レッドは瞬きをする。

なぜか四つ目があり、少女が入っていた。全然原作どおりじゃない。少女は髪で目が隠れていて、白いワンピースに身を包んでいた。

他のモンスターは静かにまどろんでいるというのに彼女だけボールの内壁を叩いている。閉じ込められているのだろうか。

（さ、さっそく人間が捕まえられてるじゃないか……）

ビビりつつ彼女のボールを持ってみようとするとかかなり重かった。

5キロくらいある。こんなのをベルトに装着するのは無理だ。鞆に放り込むしかないだろう。

「どうした？　少女が気になるのか？」

「い、いや、逆に聞くけど、君はモンスターボールの中に少女が入っているのは気にならないの？」

「何がだ？　モンスターがボールに入っているだけじゃないか」

「そ、そうだよ。ハハハ」

すでにレッドの中の常識が崩壊しようとしている。Elonaってゲーム、本当にすごいゲームだ。すごくヒドイ。

端の方でこそそやっていたオーキドが、探し物を終えたのかこちらにやって来た。手に持っているのは恐らくポケモン図鑑だろう。

「さあ誰からでもいい。選んでみるのじゃ」

「じゃあお前から選べよ」

「あ、うん」

グリーンが原作通り先に選ばせようとしてくる。レッドは緊張で溢れる唾をのみ、ボールの前に立った。

レッドはヒトカゲが好きだ。リザードンの格好良さは他のすべてを押しのける。

よって一度はヒトカゲに手を伸ばし掛けたのだが……

——バン！　バン！

小さい音が少女のボールからする。ボールの中の小さな少女はこちらを見上げ、必死にアピールを繰り返していた。汗まみれになりつつ

、無理に笑顔を作って……。

そ、そんなに見ないでくれ……。

レッドは苦しんだ。レッドはヒトカゲが欲しいのだ。だというのに、この少女はアピールを繰り返し、ヒトカゲときたら……。

「うう……」

なぜ、なぜヒトカゲは僕にアピールしないのだろう。彼がアピールしてくれたら、少女とヒトカゲを比べることができる。そして僕はヒ

トカゲを選びとれるだろう。だけど、このヒトカゲ、明らかにグリーンを見ている。凝視している。恋焦がれている！

そうか、僕なんかに興味ないってか……。くそう……。

「しょ、少女にします……」

「なるほどのう。少女は格闘タイプのモンスターじゃ。可愛がってやるんじゃないぞ？」

なんだかエロい意味に聞こえるセリフとともに少女のモンスターボール（5kg）が渡される。手にズシリと来るボールが、存在感を主張

する。

「じゃあ俺は将来飛行タイプになるヒトカゲだな」

グリーンは原作通り姑息な選び方をする。だがヒトカゲ的にはいい結果だろうし、幸せにしてやってほしいものだ。

それに、少女だっていいモンスターだ。人型だというのは有利なはずだ。

システムメッセージの説明で、この世界にはモンスター用の武器があると分かっている。ポケモンに持たせられる道具の種類を増やしたという位置づけだが、ただのモンスターには扱えない武器も、彼女なら扱えるだろう。

金槌とか持って戦ったら強そうじゃないか。うん。

そう考えて、無理やり自分を納得させるレッドだった。
ボールの中の少女は疲れてしまったのか、丸くなって眠りに落ちていた。

第一話 少女はアピールした（後書き）

少女が入ったモンスターボールの重さを確認せずに書いております。5キロは重たすぎるかもしれません。どなたかすぐに確認できる方がおりましたらぜひ教えてください。

第二話 レッドは狼狽した(前書き)

R15です。

第二話 レッドは狼狽した

「早速戦わせてみようぜ」

ポケモンのストーリー的にはオーキドからモンスターを貰った後はライバル、すなわちグリーンとの戦いである。

それはこのゲームでも一緒だった。グリーンは戦闘を提案してきたし、レッドにも断る理由は無かった。いや少女を戦わせるのにはかなり抵抗があったが、慣れないといけないと思ったのである。何しろ、クリアしなければこのゲームから出れないのだから。

「行け、『ジハード』！」

レッドは叫ぶとともにボールのボタンを押しこみ、解放する。ボールの中から赤い光が飛び出し、地面に落ちて身長140cmほどの少女になった。

『ジハード』と言うのは少女の名前だ。レッドがつけたのではなく、デフォルトでこれだった。変更は不可だ。

なぜ聖戦ジハードなどというゴツイ名前なのかは知らないが、呼び出した彼女が持っている武器を見てなんとなく納得してしまった。

ジハードは人間をトマトみたいに砕けそうな大槌を持っていたのだ。

「うー、あー…」

さっき眠っていたために寝ぼけているのか、少女はうわ言を言いつつ槌を構えた。振り回された先端が風を切り、レッドの前髪が揺れる。地味に危険だ。レッドは横に二歩距離を開けた。

グリーンもモンスターを出す。

「ヒトカゲ！」

出てきたのはオレンジ色の膝くらいの大きさのトカゲだった。尻尾の先に炎が揺れている。

いいなあ、ヒトカゲいいなあ……。

見つめられて気持ち悪かったのかヒトカゲがグリーンの足の後ろに隠れてしまった。羨ましさで爆発しそうだったので視線を外す。オーキドが何とも言えない表情でレッドを見ていた。

オーキドに愛想笑いをしていると、良いタイミングでシステムメッセージが喋り出した。

【バトルについてのチュートリアルを行いますか？】

もちろんYESである。

先ほどと同じく、ヘルプを見つつ話を聞く。

【バトルが始まると、バトル空間が形成され、バトル終了まで外界に影響を及ぼしません】

（へえ……。今もう形成されてるみたいだね）

レッドとグリーンが10メートルほどを開けて向かい合っているその周囲を薄緑色のバリアーみたいなものが包んでいた。この中で起こった床や壁への破壊行為はバトル終了後には無かったことになるらしい。

【バトルはターン制で行います。ポケモンの速度や技の速さが先攻後攻を決定します。技の指示はバトル時に出現するバトルウインドウで行ってください。技を使わないという選択もあります。その時は『自由にしろ』『攻撃しろ』『身を守れ』『攻撃を避ける』などのコマンドがあるので選んでください。また、トレーナーはアイテムを使うこともできます。その時トレーナーの行動はターンの最初になり、モンスターの行動は自動的に『自由にしろ』が選択されます】

（悪あがきは無い、と）

【また、トレーナーは1ターンに一度、自分のモンスターの行動をブーストすることが可能です。成功率や回避率、威力や命中率が上

昇します。ブーストは、技名やとらせる行動を叫ぶことでなされます」

ヘルプによれば、技名を叫ぶことが一番ブースト効果が高いが、『耐えろ』や『当てる』など、言ってみれば願望のようなことでも、叫ぶことは無駄ではないらしい。

指示した後も駆け引きがあるということだろう。

【では試しにやってみてください。この戦いのみ、敗北してもペナルティはありません】

「よし！」

レッドは少女の技を目の前に出現したバトルウィンドウで確認する。

少女のジハード

『たいあたり』 『 『 『 『

一つしかなかった。

「シンプルだなあ…」

呟きつつ、唯一の技を選択する。

グリーンの前にも同じような画面が出現しており、向こうも指示を終えたようだった。向こうには『たいあたり』と『しっぽをふる』しか無いだろうが。

第一ターン、とバトルウィンドウに文字が表示される。

次にグリーンが先行だとテロップが流れ、同時にグリーンが叫んだ。

「俺から行くぜ！ ヒトカゲ！ 『たいあたり』だ！」

グリーンの声はとてもしい声だったが、高校生がすることではないような気がする。つまり思った以上に痛々しい。僕も叫ばなきやダメなのだろうかとレッドは思った。

グリーンの力強い言葉を受けて、ヒトカゲは僅かに光ったようだった。トレーナーによるブーストだろう。

ヒトカゲの筋肉が盛り上がり、ミシミシと足の筋肉が軋む音がレッドにも聞こえた。

（そ、そんなに力を込める技なの…？）

驚くレッドの前で、ヒトカゲが地面を蹴り、弾丸のように飛び出してくる。

ヒトカゲは5、6メートルはある距離を瞬きの間に駆け抜け、レッドの真横に居る少女に体ごと突っ込んだ。腰を落とし、それを受け止める少女。

ズシッ！ と少女の体が揺れ、ヒトカゲが跳ねるように元の位置に戻って行く。

少女の膝が揺れ、苦しそうな息が漏れた。

「かふっ…」

バトルウィンドウ上で、HPバーがぎゅーんと減った。

「一発で半分以上も……！？」

ダメージが予想以上に大きい。狼狽するレッドを、グリーンがニヤニヤと笑っている。

たったの一撃で、少女は槌を杖代わりになんとか立っているような状態だ。こんな状態の少女を戦わせるなんてとんでもないことだ。

しかし……しかし、少女の目は闘志を失っていない。ギラギラとグリーンを睨みつけている。

歯を食いしばり、こちらに無言で顔を向けてくる少女。

そうだ、彼女が諦めていないなら、見ているだけの僕が諦めるわけにはいかないだろう！

レッドが頷くと、少女が嬉しそうに頬笑んだ。体の内に熱を感じる。レッドは自然と叫んでいた。

「やり返すんだジハード！————『たいあたり』！」

トレーナーのブースト効果が発動する。自分の言葉に力が乗って体から流れ出していくのが分かった。流れ出した力は、少女を覆い、鈍く輝かせる。

輝く少女は槌を投げ捨てて天を仰ぎ、咆哮した。

「イイイイアアアアアアッ、アッ！」

ノイズのような甲高い声が響いたと思った瞬間、爆発のような踏切がレッドの横の床にヒビを入れる。

そして、ゴキイ、と言う鈍い音が少女とヒトカゲの間で起こった。

踏みとどまったヒトカゲは、しかし少女と同程度のダメージを負っ

ていた。これでどちらもHPは半分以下。

グリーンが嬉しそうに笑う。

「やるなあレッド！ お互いに攻撃に特化したモンスターを選んだみたいじゃないか！ 楽しくなってきたところで残念だが、どうやら次で決まっちゃうなッ！」

「そ、そうだね！」

レッドは少女の咆哮のせいでちょっと耳が痛かったのだが、そこは空気を読んで我慢した。
戻ってきた少女が槌を拾い上げて構える。まだまだ闘志は十分そう
だ。

レッドは固くこぶしを握った。素早さは向こうが上だ。先手を取られる以上、ここは技を指示しつつ、『身を守れ』と叫んでダメージを減らすべきだろうか。

いや、それでは倒しきれない可能性もある。

それなら、闘志満タンの少女の『自由に行動しろ』に賭ける！

レッドはアイテムから『きずぐすり』を選択した。

第二ターン！

バトルウィンドウのアイテムを選択したことで、ターンの最初に、少女の頭上にスプレーが現れ、シュッと霧を吹きかける。

キラキラとした霧に包まれた彼女は、苦しそうな様子が無くなり、「ありがとう！」と言った。

喋れたのかとレッドは驚いた。

グリーンは舌打ちする。

「だが少女の攻撃じゃあヒトカゲは倒しきれないはずだ！ 次のターンに倒すだけだな！ ヒトカゲ！ 『たいあたり』だ！」

「ジハード！ …… 『身を守れ』！」

「ぐうう！」

ズン！ と少女にヒトカゲが衝突する。HPの減少量は僅かに少なくなっただったが、次の一撃をくれば倒れることには変わらない。『きずぐすり』はもうないし、勝敗は彼女の行動次第だ。

「好きに戦ってジハード！ 君に任せる！」

コクリと頷いた少女は、その身に不釣り合いな凶悪な槌を頭上に掲げる。今度は武器を使うらしい。

「—————ッ！」

声にならない叫ぶを上げてとん、とん、と軽やかに地面を飛ぶように走り、少女は襲いかかった。その攻撃は恐ろしい速度で、ヒトカゲも痛手を負うことは確実。しかし—————

—————攻撃の標的はグリーンだった。

(え、そっち?)

「おい、やめ————」

そういえばさっき睨んでたのはグリーンだった。ヒトカゲじゃなくて……

ぼんやりと思いだすレッドの前で、狼狽するグリーンに凶器が振り下ろされる。

ゴォキィ!

「ぐあああぁっ……! 頭があー!」

「ひ、ひいい……」

何かが叩き割られて何かが飛び散った。グリーンは地面に叩きつけられてバウンドし、今は痛みでのたうち回っている。その隣りでヒトカゲがドン引きした表情をしている。

レッドもちろんドン引きしていて、あわあわと口に手を当てるしかできなかった。

『自由にしろ』と言ったが少女はあまりにも自由すぎた。ルールからも自由になるとは。

心の中でさえも狼狽するレッドに、システムメツセージがなぜか誇らしそうに言った。

【このように、Elonaの無軌道かつ残酷な部分もしっかりと組み込まれているですよ】

そういうことは速く言って欲しかったッ！ とレッドは思ったが、グリーンを殴り倒した少女が嬉しそうに笑っているのを見て、何も言えなくなった。

ほっぺに返り血をつけてうふふと笑うジハードにはゾツとするような美しさがあったからだ。

Elonaがますます意味不明なゲームに思えてきた。

【そしてキチンと罰則もあります。手持ちのモンスターに非道な行いをさせるとトレーナーの善人度^{カルマ}が減少します。カルマが－30を下回ると危険人物とみなされてショップが利用できなくなるなど旅に不都合なことが起きますので、ご注意ください。初回により免除されますが、今回の行為によるカルマの減少量は－2です】

……そうですか。それでさっきからオーキド博士の視線が冷たいと。というかそういうこともできるだけ早く言って欲しいと思うんだ。

【さて、それでは勝者の時間です。敗者からお金をむしり取ってください。所持金の半分を奪う権利があります】

「う、奪えませんよね人道的に考えて」

殴り倒してお金貰うのは強盗じゃん。

メッセーじの人って地味に酷いなあとレッドは思った。

とりあえず。

相手トレーナー戦闘不能により、レッドの勝利である。

第二話 レッドは狼狽した（後書き）

E l o n aではカルマが下がり過ぎると街の守衛さん（ガード）が猛然と攻撃してきますが、ダルフィのないポケモンではクリアが不可能になりそうなので、店利用禁止プレイを強要されるだけ、という設定にしました。

あとは他人の反応が冷たくなったり、あく・どく・ゴーストタイプに好かれやすくなったりします。

第三話 神は大声で笑った（前書き）

すぐくいまさらですが、この話では「少女のジハード」という書き方をしています。これはElonaにおいて「少女」というのが、キャラの種類の一つであるためで、つまり「エルフの〇〇」、「と表しているのと同じだと思ってもらえばいいです。

第三話 神は大声で笑った

トレーナーを殴ったせいだろうか、初戦を制したというのに、ジハードのレベルは上がらなかった。レッドにもトレーナーレベルと言う物があるらしいがそれも上がっていない。

現在のレベルは少女が5、レッドが1である。

「いい？ トレーナーを殴っちゃダメだからね？」

そう伝えるとジハードはコクコクと頷くが、イマイチ通じているか不安である。

バトル後にオーキドからもらったポケモン図鑑によると、ジハードはローランという種族で、年齢によって外見があまり変わらないらしい。

レッドより少し年下だろうと思っていのだが、図鑑で見るとまだ4歳だった。

たったの4歳っ！ こんなに幼ければ善悪の区別などついているはずもない。これはレッドが気をつけていくべきなのだろう。殴った後に彼女が笑っていたことは考えないことにした。

「すまんのうレッド君。まさかあれほど凶暴なポケモンだとは思わなかったんじゃない。他のポケモンが良ければ遠慮はしなくてよいぞ？」

バトルの後、オーキド博士が謝って来た。よければ、交換してくれ

るという。

「もし……もし交換していただくとして、ジハードはどうなるんですか？」

「フム……熟練のトレーナーに預けるか、野生に返すかだのう」

少女を見ると、ワンピースを裾を持って、静かに佇んでいた。こちらを前髪に隠れがちの瞳でじっと見ているのを感じる。

「……それなら、このままでいいです。いや、この子がいいです。……おいで」

「！」

呼ぶと、少女がててて、と駆けてくる。そのままぶつかってくると思いきや、近くまできて止まり、そっと袖の端を握ってくるのだった。

「そうか。懷いておるようだしそれがいいかもしれんなあ。ただし、レッドよ」

オーキドは厳しい顔になる。

「幸せにしてやるんじゃないぞ」

やっぱり違う意味に聞こえる言葉で、オーキドは締めくくるとのだった。

血まみれのグリーンは、病院に行かなくてもなんとかなった。彼の袋の中にあった『きずぐすり』をぶっかけると傷が消え、痙攣が治まったのだ。

本当に良かった。死んでもポケモンセンターで復活できるらしいが、それでも死ぬところは見たくないのだ。

グリーンを担いで彼の家へと届け、その際、グリーンのお姉さんからタウンマップをもらった。図鑑にインストールするソフトウェアで、自分の位置が分かるようになった。マップを見る限りやはりこのゲームの舞台はポケモン初代と同じカントー地方のようだ。あとは、ゲームと同じく徐々に野生モンスターが強くなればいいのだが、このゲームはそんなセオリーを軽く無視してきそうで、怖かった。

夕暮れに照らされるマサラタウンの一角で、レッドは伸びをする。

「うーん……疲れたなあ」

鞆の中にはキャンプ用具も携帯食糧もあり、先に進むのは問題ない。しかし色々あったのでちょっと休憩したかった。

もう今日は先に進む元気がないなあ、主人公の家に戻ろうかなあと考えていると、脳内でメッセージが言った。

【旅に出る前に、神殿を訪れておくことをお勧めします】
「……神殿？」

マサラタウンにはそんなものなかったはずである。

【9柱の神々が祀られた場所です。信仰をし、神が好むものを奉納するとすると、神が対価として旅に有利な恩恵を授けてくれます。さらに信仰を深めると神々からポケモンを授かることもあります】
「へえー……」

恩恵があるなら行ってみよう。疲れてうつらうつらし始めた少女にはボールに入って貰って、レッドはタウンマップ詳細版を頼りに神殿へと向かった。

神殿は、マサラタウンの街並みに溶け込むこじんまりとした教会のような建物だった。

重い扉を押し開けて入ると、石造りの神殿は荘厳な雰囲気で満ちていた。天井のステンドグラスから入ってくる光が、どこか静かで優しい視線に見える。

訪れている人は少なく、職員のおじさんが一人、入口の近くで神殿土産のまんじゅうを売っていた。

祭られている神は大半がポケモンとは関係なかった。Elonaの神だからだ。

機械のマニ
風のルルウィ
元素のイツパロトル
収獲のクミロミ
地のオパートス
幸運のエヘカトル
癒しのジュア
富のヤカテクト

これらの8柱の神々の祭壇が円を描くように配置され、中央には清涼な水が石で囲った枠に湛えられている。小さなプールくらいの広さはあった。

そのプールの中央に浮かぶように、黄金の装飾を纏った白馬のようなポケモンの銅像が鎮座していた。周囲に睨みを利かせるように首を上げ、周囲を睥睨している。

ポケモン世界の創造神とも言うべき、アルセウスであった。

白磁の体躯にステンドグラスから入った日の光が降り注ぎ、アルセウスは今にも動きだしそうな様子を見せている。

アルセウスの銅像の下、透明度の高い水の中に『神々の休戦地とする』と字が彫ってあった。

「そもそも、元はアルセウスの神殿なんだよ」

売り子のおじさんが、暇だからとガイドをかって出てくれていた。恰幅のいい体をゆずるようにして話してくれる。

「だから多くの神の祭壇が置けるんだけどね」

基本的に神同士の仲は悪いのだが、ここはアルセウスが睨みを利かせるのでこのような状況が成り立っているらしい。

「私はマニを信仰していたんだがね、どうも尊大な口調が耳にさわって先日ルルウィ様に乗り換えたんだよ」

尊大な口調って、聞いたことがあるのだろうか。

おじさんは嬉しそうにルルウィという神のことを語ってくれる。

ルルウィという神は風の神様で女王様という言葉がぴったりで、なにより尻がいらしい。

たまに神の声を受信することがあるのだが、その時のドSぶりがたまらないとか。

恩恵は速度が上がることに。街から街へと移動する時間が短縮できるので嬉しい恩恵である。先手を取れると、トレーナーの中にはポケモンに無理やり信仰させる人もいるようだ。

「私も足が遅いと良く言われてね。速さが貰えるのは助かるんだよ」
「はあ…」

動きにくそうなお腹ですもんね、とは口が裂けても言えないので、レッドは曖昧に相槌を打った。

「そういえば、ポケモンが貰えるって聞いたんですけど」
「ああ、そうだ。かなり頑張らないとお貰えないからあまり知られていないのだね。私の家にはマニからいただいたアンドロイドがいるよ。強くは無いが、長いこと一緒にいるから愛着がわいてね。ハハハ」

恥ずかしそうに笑うおじさんの薬指には婚約指輪が嵌っている。まさか……
おじさんはレッドに下手くそなウインクをくれてから、話題を変えた。

「そうだ、他の神々のくれるポケモンを知りたいかい？」
「あ、はい」

メッセージが言ったように、信仰を含めると神の使徒が仲間になるらしい。

機械のマニはアンドロイド。
風のルルウィは黒天使。
元素のイツパロトルは追跡者。
収穫のクミロミは妖精さん。
地のオパートスは黄金の騎士。
幸運のエヘカトルは黒猫。
癒しのジュアは防衛者。
富のヤカテクトはおじさん知らないな。
アルセウスってポケモンくれるのか？

以上の物をそれぞれ貰えるようだ。なんだか全部強そうである。

下賜された使徒は捕まえたモンスターと同じように主人に服従するらしく、信仰対象を他の神に移しても仲間から離脱したりはしない。時には戦いの中で絆を深めて使徒と結婚したりする人もいる。誰とは言わないけど。

ところでアンドロイドって可愛いのだろうか。そこが気になって仕方ないレッドだった。

「あんたみたいな駆け出しトレーナーなら、体を丈夫にしてくれるオパートスがいいだろうな。なぜかって言うのだ、私がトレーナーとしてブイブイ言わせていた時にも、酷いトレーナーが居たんだよ」

困ったものだと思いを寄せてため息を吐く売り子のおじさん。

なんでも、街の外にはトレーナー自信を狙って攻撃してくるような凶悪なトレーナーがいるらしい。いくらポケモンを強くしてもトレーナーが倒れたらバトルには負けるのだから簡単に勝てると言えばそうなのだが。

しかしとても身に覚えのある話である。実力で負けているのにズルして勝ってしまったような気がするし。心が痛すぎる。

なにはともあれ、丈夫になりたいなら地のオパートスだ、とのことなのでレッドはオパートスの祭壇の前に行って祈った。

(えーと、これから信仰したいと思います。よろしくお願いします
：)

その瞬間、天から来訪する光がレッドを包み込む。ドン、と体に力が宿った気がする。

え、これだけ？ これで入信できるの。ずいぶん簡単だな……と考えた時に天空から落下してくるようなドップラー効果とともに神の声が脳内で反響した。

『フツハハハハハハッハハハハ————ッ！————ッ！　これでお前は私の信者だ！　もう逃がさんぞ————ッ！』

や、やっちまったー！　とレッドは思った。良く考えずに決めると良くないということを身を持って学んでしまった。音速で後悔した。しかし信仰によって体が丈夫になるのは事実だったので、ちょっと怖いけどいいか、という結論が出るのもまた早いレッドだった。

【ところでレッド様】

おじさんに別れを言って、帰ろうとしたところ、メッセージが唐突に声を出した。

「……何ですか？　さっきから頭の中でオパ―トス様が煩いから、手短にしてくださいね」

脳内で『フハハ！ フハ！ ハッハハハハハ！』と笑い続けている神様が鬱陶しくなってきたのでレッドの声は少々冷たい。

【アルセウスの膝元にある井戸について、説明をお聞きになりますか？】

「説明って……井戸の？ ていうかあのプールみたいなもの、井戸だったの？」

【はい。地下水と繋がっております】

なんとなく気になって井戸へと歩いていく。

覗きこむと、透明度の高い水が並々と湛えられており、底が見えないほど深い井戸のようだった。

美味しそうである。レッドは自分の喉が渴いていることを自覚した。

「飲むことはできる？」

【可能です。しかし、説明を聞かれた後の方がよろしいかと思えます。聞けますか？】

「あ、うん」

【はい。それでは——】

メッセージが言うには、Elonaの世界の井戸やトイレの貯水タンクには、不思議な効果が宿っているという。その設定はこのゲームにも適用されているらしい。

【飲むと、次の内何かが起こります】

- 1、何も起こらない。美味しい水を堪能して下さい。
- 2、状態異常が起こる。睡眠、混乱、盲目、麻痺など。
- 3、能力値が変化する。もしくは能力値の上がりやすさ（潜在能力）が上昇する。
- 4、体の変容する。関節がしなやかになったり、目が猫目になったりと、常識では考えられない変化が体に起こる。
- 5、お金が手に入る。少額。
- 6、モンスターが召喚される。出てくるモンスターはランダムで、時間がたっても消えないので強いモンスターが出たらこの場所を使えなくなる可能性がある。
- 7、何かが寄生する。お腹の中に何かが入り込んで来る。

【Elonaではもう一つ起こりうる現象がありますが、それは省かれております】

「まあ無いものはそれでいいや。とにかく寄生とモンスター召喚が良くないね……いや、でも何かに使えるかも……。とりあえず、飲むのはやめておいた方がいい？」

【無難ではあります】

「なるほど。じゃあ止めて……いや、やってみようかな。モンスター召喚なら、熟練トレーナーのおじさんがいるし」

横でボケっとしていたおじさんがギョツとして、ほほ肉を揺らしながら首を横に振った。

「いやいやいやおじさん頼りにしちゃダメだろ。今ポケモン持っていないよ？　しかし……このお土産『アルセウスまんじゅう』を買うというなら話は聞かないこともないよ。一番安くて15万円するけど」

「結構です」

15万円のお土産とか初めて聞いたわ。

レッドは主人公の家に帰ることにした。

第三話 神は大声で笑った（後書き）

おみやげ…Elonaにおける友好度UPアイテム。渡すと消滅する。15万円はぼったくり価格です。

第四話 クワガタは母と呼んでほしかった（前書き）

既にお気に入りが入っていることに感動しました。執筆スピードは相変わらずですが、やる気がダンチです。

第四話 クワガタは母と呼んでほしかった

さて。神殿を出て家に帰ろうと思ったのだが、少々気まずい。

主人公の母とは家を出るときに顔を合わせただけで、その時も「速く行きなさい」と送り出されたただだった。

いつそどこかのホテルに泊まろうかと思ったが所持金は2000円。そしてそもそもマサラタウンに宿泊施設などなかった。

これからどんな顔をして家に帰ればいいのか。

そんな心配は実際に帰ると吹き飛んだ。

「やあ、お帰り少年。さっきは自己紹介しなかったから改めて、母親役をサポートAI、クワガタだ。良いポケモンを貰って来たかい？」

第一声で、母役の人がこちらの事情を知る人だと分かったからだ。というか口調も変わっているのだが。

クワガタさん（すごい名前だ）は、レッドがプレイヤーであることも、この世界がゲームであることも分かっているらしい。他のその事情を知る人は、脳内で喋るシステムメッセージの人だけだ。他のNPCはこの世界で生まれ育って生きてきたという意識を持って

おり、そもそも自分がNPCであるということを知らないらしい。

「でも、明らかに変じゃないですか？ バトル時に出るウィンドウとか、バトル空間とか」

「その辺りはシステマ的な認識阻害と、あとは元々こういう世界に生まれてきたのことで、疑いにくくなっているんだよ。でも、所詮AIなどと言わず、君は相手を対等な人間だと思って接してやって欲しい。ゲームの中とはいえ、彼らはみんな生きているのだからね」

「あ、はい。もちろんです」

人間の形をしている物を物扱いできるほどレッドは割り切れていなかったのも、逆に助かったくらいだった。

夕食は美味しかった。ホイコーローは何の肉を使っているのか不明だったので少し怖かったが、クワガタさん曰くこの世界にもポケモン以外の生き物はいるらしい。使っているのはケンタロス肉とかじゃないようだ。

やはりポケモンを食べるのは少々抵抗がある。なんだかんだで、レッドはポケモンが大好きなのだ。ピカチュウの姿焼きなんて出てきたら発狂する自信がある。

「たくさん作ってあるから好きなだけ食べるといい」

クワガタさんは、改めて見ると目元のキリッとした美人だった。気後れしそうになるレッドを旨く会話に引っ張り込むもある。ものすごい勢いで食事をかきこむ少女のジハードの存在もあり、夕飯はかなり楽しい一時であった。

少女の頬に飛んだソースを拭ってやっている、クワガタさんがフォークでパスタを巻きながら訪ねてくる。

「そういえば少年。マサラタウンの横の草むらがあるだろう」

「はあ……あるかもしれないですね」

「うん。确实にある。そしてそこには入らない方がいい」

「草むら……」

レッドは思い出す。

マサラの横の草むらは、ポケモン初代にて、決して入れなかった場所だ。そのため、そこでは伝説のポケモンが出てくるだのLV100のフシギダネが取れるだの、様々な噂が飛び交うことになったという。バグを利用して入ることもできるが、その場合はフリーズするのがお約束だった。

「入ったら何があるんですか？」

「うむ。Elonaの一番強力なダンジョンがある。通行証がなければダンジョンには入れないのだが、入口に近づくだけでも危険なんだ。挑むとすれば、とりあえず手持ちのポケモンのレベルは100以上欲しいところだ」

「100以上……」

「うん？ 100以上にはならないか？ そんな制限はないさ。ポケモンのアニメでもピカチュウのレベルは600くらいあるはずだ。全然問題ない」

あれは例外だと思っんですけど。

「そのダンジョンには、クリアが目的なら挑戦する必要はない。このゲームにおけるクリアはポケモンリーグの制覇だからね。だから腕試しがしたくなるまでは、危険なことだけ覚えておけばいいよ」

クワガタさんはそう締めくくり、パスタをモリモリと食べ始める。テーブルマナーとかにはまるでこだわっていない。豪快な人である。

そう言えば、さっきから『フハハ』とうるさいオパートス様の声がしない。神も晩御飯を食べているのだろうか。

疑問に思っているとクワガタさんが怪訝な顔をする。

「どうした少年。私を母と呼んでいいのかどうか迷っているのか？」
「もちろん違いますよクワガタさん」

僕たち他人ですよね。

神の声が煩かったことと今は聞こえないことを彼女に喋ると、クワガタさんはおお、と手を打った。思い当たることがあるらしい。

「それはだな、少年。今脱いでいる君の野球帽の効果さ。君が被っていたのは、神の声を受信するという効果を持つ帽子だったのだよ」
「へ、へえー……」

何の変哲もない赤い帽子だったが、実は変な効果が付いていたらしい。とりあえず、明日から帽子を被らないことは決定した。

しかし気になることがある。そういう効果のある帽子は普通なのだろうか。電波を受信するのは一般的なこと？

尋ねるとクワガタさんは首を横に振った。

「いや、割と珍しい効果だ。普通は神とは中々触れ合えない。しかし、効果を持つ衣服や道具は多い。それこそ、振っただけで先端から雷が飛び出す剣や、着ているだけで体から血が噴き出す服まで、その効果は様々だよ」

「随分とまあ……物騒ですね」

「そうだな。良い効果も悪い効果もあり、それらは全て使う人次第だということだ。もし良い効果を持つ装備を君が手に入れ、君のポケモンが装備できるなら装備させてやるといい。幸いきみのポケモンは人型だ。装備できる部位も多く、たいていの装備品を活用できるだろう」

部位とは足や腕などのことで、これがなければ例えば兜や籠手が装備できなくなるということだった。つまり：ゴースなどは兜しか装備できない……ということだろう。

納得したレッドを見て、クワガタさんは続ける。

「そして帽子のように軽い衣服などは、君でも装備可能だ。トレナーレベルが上がれば使えるようになる魔法や魔道具を使いやすくする効果を持つ物もあるし、有用そうなものは売り払わずに持っておくのを勧めるよ。持ち運ぶのに重い場合は、この家で預かっておけるから積極的に帰ってくるといい。うむ、帰ってくると良いんだ」

最後のところに力を入れて、クワガタさんはこちらを見つめてきた。レッドは気圧されながら返事をする。

「ま、まあ暇になったら帰ってきます」

「う、うむ！ 頼むぞ！ その時はぜひ私に旅の話聞かせるんだぞ！ 約束だぞ！？」

レッドの答えは合格だったらしい。嬉しそうにゆーびきーりんまーんとか懐かしいことを強要されたが、レッドは悪い気分はしなかった。旅に出たとして、帰りを待っていてくれる人がいるというのは贅沢なことだと思ったからだ。

指切り（嘘ついたらケツドリルとか名のいう恐ろしそうな罰ゲームに代わっていた）をし終えたクワガタさんは満足そうに息をつき、不意に言った。

「しかし、息子と娘が一度にできた気分だな……。なかなか悪くない。さあ少年、私のことを母と呼んでも、私は一向に構わない！」

胸を張ってさあ来いという姿勢の彼女に、その予定は全くなかったが、少し呼んでみようかな、と思ったレッドだった。

隣ではお腹がいっぱいになった少女が眠りこけ、鼻ちようちんを出していた。

次の日の朝。

「頑張ってこい少年……いや息子よ！」と送り出されて、レッドは一番道路に歩き出した。マサラタウンとトキワシティを繋ぐ道だ。ゲーム世界での目覚めは良く、足取りは軽かった。

ふと、隣にジハードがいないのに気付き、振り返る。少女は無口で佇んでいた。無口と言うか、頭頂部で二つに分けた長い金髪が表情を隠しているので表情を窺いにくいのが、ボーっとしているだけなのか。手には大槌を持っていない。あれはバトル空間でだけ装備できるようだ。

足を止め、「いくよジハード」と声をかけるとハッと顔をあげて子犬みたいにちょこちょこ寄ってくる。可愛い。正直かなり情が移った。とても昨日グリーンを殴り倒した少女には見えない。そういえばグリーンは大丈夫だろうか。

「心配だからちょっとグリーンの家に行って行こうか」

ジハードがコクリと頷いたので、グリーンの家に向かうと、すでに彼は旅に出た後だという。あんなに血が出ていたのに元気なことだ。それとも『きずぐすり』の効果がそれだけ強力だということだろうか。何にせよ、良かった。

憂いも晴れて、さらに軽くなった足取りでレッドは一番道路に足を進めた。



初代ポケモンの攻略フローチャートは、

マサラタウン≫一番道路≫トキワシティ≫トキワの森≫ニビシティ
(ジムリーダー戦一回目)≫……

と続いていく。タウンマップの西端のルートを北に北に進んでいく

のだ。トキワシティにもジムはあるのだがリーダーのサカキが不在なので入れない。シナリオでは最後に訪れるジムとなる。

とりあえずはこれに従って進もうとレッドは思っている。このゲームではどこまで当てになるか知らないが、知っている情報がある方が攻略も早いだろう。

よってマサラタウン≫一番道路（今ココ！）である。

道路は遠くまで見渡せる草原だった。草は意外と深く膝丈だ。日光を浴びて伸び伸びとしている。

ゲームでは数分歩けば終わる一番道路も、この世界では一日かけて踏破できるかどうかという距離になっている。レッドはあまりの距離にビビってバスがないか探したのだが、トレーナーは移動も修行だと言うことで乗車を拒否られ、歩いていくことになってしまった。そういえばゲームでも、そこボート使えばよくね？ という場面でも波乗りがないと進めないしね。

幸い野宿するための道具はあるし、途中に宿泊小屋も作ってあるという。進むのに必要なのは根性だけだ。

「よし！」

レッドは頬を叩いて気合いを入れ、記念すべき旅の一步目を踏み出した。

そして直後にモンスターに襲われた。

ブン！ と瞬時に辺りがバトルフィールドに覆われる。少女の手に大槌が具現化され、レッドの前にバトルウインドウが形成される。ウインドウの中を『BATTLE START!』というテロップが警告のように赤い文字で流れた。

ガサガサと草むらが揺れ、モンスターが飛び出してくる。

（記念すべき初のポケモンだ——……これポケモン？）

「チューー！」

ヒゲを震わせこちらを威嚇してくるのは、ずんぐりとした茶色い体の、でかいネズミだった。

そうネズミ。断じてコラツタではない。前歯も飛び出でないし、目も耳も大きくない。そこらへんの下水道から出てきたぜ！ と言わんばかりの汚い毛皮は、ポケモンと呼ぶには大変な抵抗があった。恐らくEilonaに出てくるモンスターなのだろう。モンスターと呼ぶのにすら抵抗があるが。

ウオン！ と少女が大槌を構えて風が起き、それを頬が撫でたことでレッドは考えを打ち切った。ポケモンっぽくないからとはいえ、

バトル空間が形成されている。これは戦いが終わらなければ無くないのだ。

だったら、倒すまでである。

「行けえジハード！ 『攻撃しろ』！」

今回は、技を使わない状態でダメージを計ることにしたため、指示は『攻撃しろ』である。敵のレベルは2だ。試す余裕くらいあるだろう。

トレーナーのブースト効果によって、レッドの声と共に輝いた少女は頷き、大槌を振り上げる。

ジハードが持つ大槌は、長い鉄の棒の先にギアのようなデコボコとしたものがひつついているもので、ミニ四駆の前輪と後輪の駆動を連結させる長いパーツみたいな形状だ。素材は鉄でできており、殴られればそれはそれは痛そうである。

「あああッ！」

先手はこちらだ。少女はネズミに走り寄り、大槌を振り下ろす。レッドはバトルウインドウの敵のHPバーを見て、どれくらいダメージが入るか確認しようとしていた。そのレッドの耳に聞きなれない音が響く。

グチャッ！ というえぐい音だ。

「？」

顔を上げたレッドの頬に、何かの飛沫が飛んでくる。頬をこすってみると、赤い物が手に着いた。これは何？ いったいどこから？ 答えはすぐに分かった。少女の槌の下でミンチになっている何かからであった。

少女はにっこりと笑っている。しかしその下にあるのは紛れもなく、こと切れた死体。

死体だ。頭蓋をたたき割られたネズミの眼球は飛びだし、視神経がつながったまま地面に落ちている。血痕が放射状に広がっていた。

（えっぐツツツ！）

死体を生で見たのは初めてだ。瞬間的に吐き気がする。

しかし、吐き気は嘘のように収まって行った。精神が許容値をオーバーしそうになったため、防護機能が働いたのだろう。VRゲームでは基本的な機能だ。感情を操られているようで不快だが、取り乱さないのはありがたい。

でもあえて言うなら、こんな機能が必要ないような世界観が良かったよお爺ちゃん。

「♪」

少女が駆け寄ってくる。近くに立ち、レッドを見上げてくる。褒めて欲しそうだ。少女の白い服に赤い飛沫が飛び散っていた。それもバトル空間が消えると同時にかすれて消え失せていく。頬の血の跡も同様だ。

現実感が少し希薄だった。

レッドはとりあえず、という風に少女の頭を撫でた。うれしそうにする少女がさらに現実感を遠ざける。

しかし忌避感を感じないのだ。不思議な気分だ。これにも慣れなければならぬのだろうな、とどこか他人事のように考えた。

レッドがショックから抜け出す前に、次のモンスターが襲ってきた。

今度出てきたのは、大きなノウサギだった。レッドを見て、敵意をむき出しにしており、それを見たジハードが好戦的に、壮絶な頬笑みを浮かべた。

レッドは躊躇している。

このゲームには残酷な残酷があります。このゲームには流血の描写があります。VRゲームはこれが初めてだが、そのようなゲームは腐るほどやって来た。少々気分が悪くなりつつも、臨場感を出すための良いスパイスだと思っていた。

しかしそうではないのだ。血とは、命の中を流れる物であり、残酷さとは、それを無碍に摘み取る行為に冠せられるものだった。

「……」

ジハードが不安そうな顔をしてレッドを見ていた。そうだ、例えばレッドが怖気付き、このバトルを放り出したとしよう。すると、どうなるだろう。

結論として、ジハードが傷つく。

触らなければバトルウインドウは20秒で勝手に閉じる。あとは『自由に行動しろ』がバトル終了まで選択され続けるらしい。

少女は、ネズミを一撃で屠った。しかし、レッドがブーストせず、技も使わせなければ、血を流すのは今度はジハードになるかもしれない。

ヒトカゲにやられて苦しそうな少女の姿が、脳裏にフラッシュバックする。

自分が傷つくのであれば、ウジウジするのも良いだろう。しかし他人が傷つくのであれば、それは害悪である。ジハードに情が移っている。彼女が大事だ。自分の弱さでジハードを傷つけるのは許容できない。

(それはダメだ……)

レッドはそう思った。意を決し、バトルウインドウに指を伸ばす。指示は『たいあたり』。

ブーストしたただの攻撃でネズミは死んだ。ウサギのレベルはネズミと同じく2だ。技をブーストしたら大変なことになるだろう。

それでも、少女が傷つく可能性を減らしたかった。

「一撃で倒せジハード！ 『たいあたり』だ！」

レッドの言葉がジハードをブーストさせる。少女は叫び、地面の土を踏みぬいて駆け、ウサギへぶちかましを食らわせた。ウサギは少女がぶつかった瞬間、ビチャツ、と血袋のように弾け飛んだ。

想像以上にエグイ。直視したくない。とても勝利を喜べない。しかし、これがこの世界の現実なのだ。目を背けてはいられない。

「むう……」

口を噛むレッドに、血まみれの少女が走り寄ってくる。レッドは彼女の勝利を喜べない。しかし労ることはできた。

「お疲れ様」

頭を撫でると、少女は目を伏せる。顔にべったりと血が付いているので分からないが、もしかしたら照れているのかもしれない、とレッドは思った。

【少女のジハードはレベル6になった!】

【少女のジハードは『にらみつける』を覚えた!】

第四話 クワガタは母と呼んでほしかった（後書き）

二つに分けても良かったですね…

第五話 ロミアスとすれ違った（前書き）

なぜか感想を受け付けないというマゾい設定にしていたので誰でも書けるように直しました。

第五話 ロミアスとすれ違った

少女が先ほどレベルアップした。ウサギを体当たりで爆散させて血まみれになった少女だが、今は返り血も消えており、綺麗なものである。

レベルアップしたといっても見た目はまるで変化はないがこれでレベル6。着実に能力値は変化している。具体的に言うと、HPと攻撃がやや高めに上がり、それ以外はほとんど上がっていない。成長量は他の初期ポケモンと同じくらいのもようだった。

少女のジハードは格闘タイプである。最初に戦うことになるジムリーダーのタケシと闘うまでに、格闘タイプの技を習得してほしいところだ。モンスターが出たら積極的に戦うとしよう。少女は相変わらず闘志むき出しだし、僕も戦闘に慣れる必要がある。

しかし……ポケモン由来のモンスターもスプラッタなやり方をするのだろうか……。見たくなえ……。

一応、気絶させるだけでも戦闘は終了するようだが、そんな手加減ができるわけがない。実際、気絶によって戦闘が終わったのは一回だけだ。それ以外は皆、酷い状態になってくたばった。

「はあ……空は青いな……」

色々と精神的に疲れてクワガタさんの家に帰りたくなるが、甘え

てばかりもいられないので先に進むことにした。クワガタさんに甘え過ぎると泥沼に嵌る気がするのだ。あの人はなんだかんだで超甘えさせてくれそうだし。

朝にマサラタウンを出発し、幾度か休憩を入れて歩き続けて昼になった頃、ついにポケモンのコラッタが現れた。初の野生のポケモンである。

この時までには、少女はネズミを四匹、ノウサギを三匹、（腕くらいある）ムカデを一匹叩き殺している。それらに加え、プチという異様に柔らかい、絞り出したホイップクリームみたいな見た目のモンスターも倒した。プチはEionnaの最弱級のモンスターだとか。どおりで勢い良く弾けたわけである。

殺していると稀に皮やら骨やらがドロップする。血痕とそれだけが残るので結構不気味だが、メッセージさんによると売れるかもしれないのでレッドは全部確保することにした。なんだか、この頃からシステムメッセージの人格のことを心の中でメッセージさんと呼んでいたことに後で気がついた。名前も知らないものでこれで良いかな、と思っている。

そろそろ戦闘には慣れてきていた。少女が血みどろになって微笑んでいる姿を見ても割と平気になってきている。

レッドがそこまで進歩している間に少女のレベルはもう一つ上が

り現在Lv7であった。やっぱり大した変化はなかったがお腹は空くそうで、今は口をもぐもぐ動かして、さっきドロップした『プチの死体』という名の生肉を食べているところだ。

ドロップした——つまり地面に落ちた肉は汚いと思うのだが、『プチの死体』がドロップした時、レッドが拾う前に少女が拾って即座に食べ始めてしまったのだ。お腹が空いていたのだろう。生肉を貪る少女は予想以上に酷い絵面であり、レッドは発する言葉を失った。ちゃんと止めておけばよかったとレッドは後悔している。

口の周りが血だらけの少女は猟奇的に過ぎるのだ。

そこにコラッタが飛び出してきたわけである。

「—————！」

モンスターが襲ってくる前兆は、バトル空間の展開である。周囲に緑色の薄いバリアーが張られ、外界と隔離される。レッドの前にバトルウインドウが出現し、少女は急いで口の中の肉を咀嚼した。

ガサリ、と草むらが揺れ、コラッタが飛び出してくる。目が大きい。耳が大きい。歯が出過ぎている。可愛さを優先し、およそ野生を生き抜くには適さない身体構造。

（これでこそポケモンだ！）

これまでプチとヒトカゲを除いてでかくなっただけの動物ばかり見てきたため、レッドは少し感動した。

しかし今からこのコラッタを血祭りにあげなければならない。動

物をミンチにするのはもう割り切ったが、ポケモン相手だとちよつと腰が引けてしまう。

そんな自分を叱咤し、レッドは『たいあたり』を選択した。初見の敵にはとりあえず最大火力をぶつけて見るのだ。コラッタはLv 5なので、恐らく負けなと思うのだが……

これまで、何体かモンスターを倒したのだが、ヒトカゲを除いてまだ『技』を使われたことは無い。『技』の威力の高さは少女の戦闘ですでに分かっている。レッドは自然と慎重になった。

第一ターン！

敵の方が早い！ レッドのバトルウインドウにコラッタの技名が映る。『しっぽをふる』だ。

コラッタがこちらに尻を向けて、割と長い尻尾をフリフリと可愛らしく動かしている。なんだか蠱惑的な動きで、つついレッドも体が動いてしまいそうである。

「し！し！」

レッドがそうなのだから、敵をミンチにすることとお腹いっぱい食べることを以外考えてなさそうな少女のジハードはぼちり引っかかっていた。

だめだ、警戒心が薄れている！ このままでは攻撃されたときに旨く防御できないだろう。これが『しっぽをふる』の効果か……！

「ダメだジハード、惑わされるな！」
「！」

レッドの声に少女はハッと気が付き、しかし自然と彼女の眼はコラッタの尻尾を追ってしまふ……。ああ、自然と体までフラフラと……！
『しっぱをふる』、なんと恐ろしい技だ……！

「ええい！ 一撃で倒してしまえば問題ないさ！ ジハード！ 『たいあたり』だ！」
「————ッ！」

その声を聞いてジハードは敵を倒す衝動を思い出したようである。

少女は大槌を放り捨て（技を使うと毎回放り捨てるのだ）、奇声を発しつつコラッタに襲いかかる。体に力を入れ、向かい打つコラッタ。

二者の間でゴギ、と鈍い音がして、少女が駆けて戻ってくる。コラッタの方を見ると地面につけた四肢がプルプルと震えていた。前歯が折れている！ 目に力がない！

（こ、これは割と瀕死な状態だ！）

いける！ とレッドは考えた。彼はオーキドから図鑑と一緒にモンスターボールを貰っていたのだ。これならゲットすることができ……る！

原作なら草むらで「おじさんのポケモンゲット講座」を見てからになるのだろうが、そんなことは知ったことじゃない。今ココに！

瀕死のポケモンがいるのだ！

バトル中にはポケモンにも触れないし、鞆の中に手を入れることもできない。ではどうするかと言うと、バトルウインドウの『アイテム』から、モンスターボールを選択するのだ。

第二ターン！

レッドの手の中にモンスターボールが出現する。レッドはそれを握りしめた。

「おらっしやああああああ！」

レッドはオーバースローでモンスターボールを投げつけた。このボールがぶち当たったらコラッタ死んじゃうかもと思ったが、そうならその時である。

コラッタは僅かに逃げようとしたようだが、瀕死の体ではそれも無理だ。敵を弱らせるないと捕まえられるのはこのタメだったのか！

しかし、コラッタはただ漫然とボールを見ている訳ではなかった。気力を振り絞り、尻尾を振り回したのだ。

パン！ と空中で弾かれ、分解するボール。

（弾いた！？ ていうかボール壊れるの！？ 脆っ！）
もろ

二度と使えそうにないほどバラバラになったボールが虚空に消え、コラッタはカッとレッドに向けて威嚇する。こ、こいつ、そんなに僕につかまるのが嫌なのか……？

その後はサクサクと、コラッタの『たいあたり』で少女が少しダメージを受け、コラッタは自由に行動した少女に殴り殺されてミンチになった。それはそれは酷い光景だった。コラッタのこぼれた脳みそなんて、子どもが見たらひきつけを起こすだろう。

コラッタの死体が消えた後、そこにはなぜかコラッタの剥製はくせいが出現する。

【E l o n aでは生物を殺すと剥製やカードが時々ドロップするのです。良かったですね】

そうですか、としか言いようがない。こんなかさばる物何に使うのだろう。意味不明だ。

しかしこのコラッタ、やたら顔がキリッとしてる。ちょっと格好いい。そんなに重くもないし持って行こう。初めての野生ポケモン記念だしね。

「高く売れるかもしれないし」

【それはありません】

「ないのか……」

少女は疲れたのか、コラッタの剥製に座って「ふう…」と休んでいた。それを見て椅子にも使えるか、と剥製に利用価値を見出したレッドだったが、やっぱり罰当たりな気がするるのでやんわりと注意しておいた。



空が夕焼けに染まってきている。モンスターとの戦闘に時間を割き過ぎた気がするので、行程は遅れている可能性があった。お陰で少女のレベルはまた上がったが、小屋が見つからなければそろそろ野宿する場所を決める必要があるだろう。

（どれくらい来たかな）

ポケモン図鑑でマップを確認すると、一番道路の真ん中あたりにレッドの居場所を示すポインターが点滅している。半分ほどは来ているようだ。GPS搭載のこの図鑑は、子どもにほいほい上げていような物ではないのと思うのだが、オーキドはそれだけレッドに期待しているという設定なのだろう。

後ろを無言で着いてくる少女を振り返ると、レッドを見上げる彼

女に先の戦いで負ったダメージは見られなかった。戦い終わりに全快するわけではないが、ポケモンと違ってよほどひどいケガでない限り、時間経過で勝手に回復するようである。『きずぐすり』の節約ができて大変助かる。もう一つも持っていないが。

しばらく歩いていると行く手に小屋を見つけることができた。「無料で使っている」「綺麗に使ってくれ」「長期間の利用は遠慮してくれ」という内容が書かれた看板が立っている。探していた無人宿泊施設に間違いがないだろう。

ヤレヤレ良かったと中に入って休もうとすると、ちょうど中から人が出てくるところだった。

年上の青年で、西日に照らされた髪の毛が凄まじい色になっている。元の色は恐らく緑色ではないかな、とレッドは見当をつけた。

「む」

「あ、どうもこんにちわ：こんばんわ？」

「子供か？ こんな時間にこんなところで何をしている」

それはこっちのセリフでもある。大体この世界がポケモンのゲームなら子どもが一人、街の外でフラフラしているのも別に変ではないだろう。その気持ちが顔に出ていたのか、緑髪の男は弁解を口にする。

「…そのような顔をしないでくれないか？ 樹海から出てきたばかりでこの辺りの事情には疎いのだ。何せ…」

（樹海……？）

「どうしたのロミアス、誰かいるの？」

小屋の中から女の人の声がして、ロミアスと呼ばれた青年が振り返る。背中には大きな袋を持っていた。もしかしてこの小屋から出ていくところだったのだろうか。

この時気がついたが、ロミアスの格好は現代人の物とは違い、少々古風であった。ベルトの代わりに皮の帯で腰を閉めるような衣服である。

「ああ、子どもだ。『少女』を連れている」
「そう…」

女の人の声に答えると同時に、ロミアスは中に入って行ってしまった。

「どういうことだろう…分かる？」

首を横に振る少女と顔を見合わせていると、中からボソボソと会話が聞こえてくる。

……トレーナーかしら……恐らくな。証をつけている。しかし……
……それなら、お互いに関わらない方がいいわ………だな……

このまま聞き耳を立てるのが失礼に感じて、少し距離をとろうかと思っていると、二人が小屋から出てきた。緑色の青年と、水色の髪の毛をした二十代前半の女の人である。女性は周囲に清涼な風が吹いているような不思議な雰囲気があった。服装は青年の物と似ている。

女性はふわりと笑いかけてくる。

「こんばんわ。空が綺麗でいい夜ね」

「は、はあ……」

生返事を返すレッドに緑髪の男が話しかけてきた。

「折角の出会いを大事にできないのは残念だが、急いでいるので私たちはもう行かせてもらう」

「え、はい」

「それと、駆け出しであろう君に一つ忠告しておこう。早く街へ行くことだ。じきにエーテルの風が吹く。君がシェルターを持ち歩いているなら話は別だがな」

「……さようなら。あなたの旅に、風の加護があることを祈ってるわ」

エーテルの風とは何だろうか。危険な物のようだが……。レッドが疑問を発する前に二人は歩き始めていた。まあいいか。メッセージさんに聞けばいい。

そんなことよりレッドは疲れていたのだ。早く休みたい気持ちでいっぱいだった。ふかふかのベッドと1kgの金塊であれば前者を選ぶくらい疲れていたのだ。

小屋の扉を開き中に入ろうとして、ジハードの様子を見ると、彼女は二人が去った方をじっと見ていた。

「ジハード？」

呼ぶと何事もなかったかのようにちよこちよこと寄ってくる。顔を見つめると小首をかしげて疑問を浮かべるだけだ。まあいいか。

それよりさっさとご飯でも食べて寝てしまおう。

小屋の扉を開けると、木材の匂いが溢れてくる。

「結構広いね」

15畳ほどの小屋の中には寝台が二つと、木製のテーブル、そして台所があった。壁にコンロに流し台、包丁などの台所用品にどうやって水を引いているのか蛇口もある。調味料の類も完備しており、電灯まで付いていた。至れり尽くせりであった。トイレがないことに気がついたが、そう言えばこの世界ではトイレに行かないでいいのだ、と言うことに気がついた。

「はー、すごいねえ。これなら簡単な料理ができるよ。さっき拾った肉で何か作ろうか」

そう言うと、少女は顔を輝かせて頷いたのだった。

【エーテルの風ですか。先に聞いてしまうのですか？】

「先に聞いとかないと危ないことだと思っただけど」

【そうです。しかしレッド様が突然風に吹かれて慌てふためくシーンを、私は楽しみにしておりました】

(性格悪っ！)

メッセージさんは、レッドに対して協力的なのかどうか計りかねる存在である。夕食の席で、肉のスープを貪る少女を横にレッドはそう思った。

鞆の中に入っていた幾つかの木の実と鶏肉のスープは存外に美味しく、レッドは満足だった。少女もそう思ったようで、黙々とスープをすすっている。

スプーンを持ち方が変わったので直してやりながら、レッドはメッセージさんに話を聞いてみたのだ。

【エーテルの風は、E l o n aにおいて一年に4回、三の倍数の月の頭に吹き荒れるエーテルを含んだ風です。人間がその風を浴びるとエーテル病という病気にかかり、頭が肥大化するなど体の一部が醜く変化します。

治療には高価な薬を飲むしかなく、エーテルの風が吹く時はシエルターに入るのが常識です】

「そ、それって知らないことにならないんじゃない？」

【なって欲しいという、私のささやかな願望はすでに打ち砕かれてしまいました……。

しかし尋ねられると答えなくなる私の性^{さが}には逆らえないのです……！ ああ……】

「メッセージさんえげつねえ……」

なにやら悲嘆にくれた声を出しているが、言っていることは最低である。レッドが疲れてこぼした言葉に、メッセーじさんは反応した。

【む？ 今なんと？】

「え、いや……そう意味じゃなくて、ほんの少し思っただけっていうか。ほら、あれだよ」

【そうではなく私を『メッセーじさん』だと……おっしやいました？】

「い、言いましたけど何か……？」

やべー、地雷踏んだかなあと思ってレッドは焦る。しかしメッセーじさんの答えは「否」であった。

【いえ！ メッセーじさんと呼んでくださって結構です。お気になさらず。むしろ推奨しますので、存分にどうぞ】

凄く気に入ったらしかった。偉そうにふんぞり返っているお姉さんの姿を幻視してしまった。メッセーじさんはさらにブツブツと続ける。

【しかし名付け親には敬意を払うべきでしょうね。……父と呼んでも構いませんか？】

やめてください。

硬い寝台に少女と身を寄せて眠りに着く。外は肌寒く、荷物には薄っぺらい毛布が一枚しかないので苦肉の策だ。レッドの腕を抱えて寝ている少女が暖かい。

（ううむ…これは…良くない…）

ぜひ毛布の購入をしなければならぬと思いつつも、モンスターボールに少女を仕舞うという案は却下した。4才だとはいえ姿は15歳前後の女の子がひつついてくるのを嬉しく思わない奴はタダのホモだ。少女って実はかなり可愛いし。

と言う訳でそれなりに興奮していたが、疲れてもいたのでレッドは早々に眠りに落ちた。

なんでこの世界、排泄しなくていいのに性欲はあるんだよ、と思いつつ。

翌朝、レッドは良い気分で見覚ました。

木の匂いと節々の痛みに、一瞬どこだか分からなかったが、すぐに思い出した。隣の少女は眠ったままレッドの服を噛んでもごもご

している。ご飯を食べる夢でも見ているのだろうか。苦笑し、食いちぎられない内に少女を揺り起して、朝ごはんの用意を始めた。

今日中にはトキワシティに着くだろう。原作のポケモンでは、最後のジムリーダーがいる街だ。この世界では一体どうなっているだろうか。

レッドはまだ見ぬトキワシティに思いをはせるのだった。

第五話 ロミアスとすれ違った（後書き）

綺麗なロミアスもたまにはいいかと。

第六話 ウンガガは死んだ（前書き）

途中で出てくる◆◆◆はここで半分ですよ、というマークです。長くて読むのがめんどい、という方がいたら、そこで休憩入れて下さい。

まあ6千字足らずなのでそうそういらっしやらないでしょうけど。

第六話 ウンガガは死んだ

「メッセージさんは、ストーリーを知っているの？」

【いえ、私は基本的な情報を与えられたにすぎません】

「じゃあ、このことは知らなかったんだね」

【そうですね。まさか、トキワシティのジムが――】

昼過ぎである。小屋から歩き続け、少女のレベルが10になり、『けたぐり』『きあいだめ』を覚えたところで、トキワシティが見えるところまで来た。

そして、もうもうと上がる黒い煙を見たのであった。

何かの行事のせいかと思いましたが、駆けつけて見ればトキワシティのジムからものすごい勢いで火の手が上がっていた。すでに消化は終盤に差し掛かっており、水ポケモンが大量の水を噴き出しているシーンであり、レッドたちにできることは無かったが、レッドはそれなりにショックを受けたのだった。

【そもそも、このゲームにはストーリーと呼べるものはありません。各地にいるNPCが自分の都合で動くので、思い通りに操作するのは困難ですし、計算領域が絶対的に不足します。そもそも思考に過度の制限などを加えれば違和感が残り自分がデータだと気が付いてしまうNPCが出てくるため思考に手は加えられていません。

もちろん、特定の思考傾向を持った人物を配することでレッド様

を誘導することはできませんが、真実決まったシナリオはないのです】

「で、その結果がトキワジムが全焼と…」

少女のジハードもほけえ、と消火活動を見上げている。トキワジムは体育館ほどの大きさがある、立派な建物だったのだろう。しかし今は見るも無残。ここでバッジを貰おうと来た人にとっては残念な事態だ。他のバッジを取り終えるまでに治っていると良いなあ、と他人事丸出しな思考でレッドは思う。

「お、レッドか。ちょうどいいところに」

突然肩をたたかれる。振り返れば、懐かしい顔があった。懐かしいといってもあつたのは一昨日のことなのだが、濃密な一日がそう思わせたのだろう。

「グリーン！」

少女に頭を凹まされたライバルのグリーンである。彼は健康そのものの顔で、よ、と手を挙げる。元気そうな様子に安心した。

「今暇か？ いや、何か用事がないなら付き合ってくれ。一人じやあ不安だな」

グリーンはソワソワと街の東側を見ながら言う。この身はグリーンの友達だという設定で、グリーンはレッドの性格の変化を当然と受け止めるように思考回路を誘導されているNPCらしい。つまり未だに向こうはレッドのことを友達だと思ってくれているのだ。そこはメッセージさんが太鼓判を押してくれているので問題ない。

設定上とはいえ友達の頼みだ。暇だし手伝うのもやぶさかではないが、いったい何を手伝うのか。その辺を聞いてからにしたかった。

「じゃあ歩きながら説明するよ。できればポケモンはボールに入れておいてくれ」

不満そうな少女にボールに入って貰うと、グリーンはせかすように街の東へ歩き出した。確かあっちには山があるだけだ。道はない。

「実は俺、この火災の犯人を見たんだ。その片割れをさっき見つけてな。尾行しようと思ってる」

そう呟く顔は、冗談を言っている風には見えなかった。

グリーンが尾行する相手を見て、レッドは声をあげそうになった。

—————ロミアス！

ここに来る途中ですれ違った緑髪の青年だ。特徴的な服ではなく

なっていたし帽子で髪を隠していたが、チラッと顔を見たところ間違いがなかった。

物陰から買い物をするロミアスを見つつ、グリーンは小声で喋り出した。

「昨日の夜、ヒトカゲが急に騒ぎ出して、俺は宿の人の迷惑になると思って外に出たんだよ。そしたら、あー、俺が泊まっていたのはポケモンセンターの無賃宿で、だからトキワジムのすぐ裏だろ？俺が出たところ叫び声がしててな。何か陰悪な様子だったから隠れて見て見たんだよ。別に酔っ払いの喧嘩だったら放って帰ればいいし、誰かが絡まれていたりしたら助けたいと思って」

自分の少年臭い正義感が少し恥ずかしかったのか鼻をこすり、グリーンは続けた。

「そこにいたんだよ。あの緑色の髪した男と、水色の髪をした女だ。影になって見えなかったけど、誰かと言い争ってた。そのうちポケモンバトルをしだして、バトル領域で区切られて、こっちに声が聞こえなくなったから、ヒトカゲも寝てたし、俺は帰ったんだよ。ただの喧嘩かってな。でも、今朝起きて見ればトキワジムが燃えてるし、あれはきっと関係あると思うんだ。犯人って決めつけるのは違うかもしれないけど、話を聞こうと思って。あ、動くぞ」

ロミアスは多くの食糧を買い入れ、さらに幾つかの衣料品をまとめて買って、早足で歩いていく。隠れながらついていくのは割ときつかった。トキワシティに街路樹が多くて割と助かっている。

息を切らしながらレッドは応えた。

「わかった、手伝うよ。時間はあるし」

良かった、とグリーンは笑った。

「あいつら凄くレベルの高いモンスター使ってたから、一人じゃ不安だったんだ。お前がいて良かったよ」

「え、レベル高いのは……何もできないかも」

「隣にいただけで良いんだ。俺が心強い」

グリーンは言い切った。決して撃たないけど懐に入れておくと度胸が持てる拳銃のような扱いだった。

レッドは自分になる前の主人公がどんな友情を育んでいたのか知りたくなった。また、このグリーンの期待を裏切りたくないな、とも。

ロミアスは街の郊外まで来て、辺りを見渡すと山の中へと踏み込んだ。

「もしかして、仲間が怪我でもしてるのかもな」

道路の汚れを見てグリーンは言った。良く見ると、それは渴いた血液に見えなくもない。

「後を追おう」

ロミアスを追って踏み込もうとするグリーンを、レッドは止めた。服の後ろを掴んだので首が詰まってらしい。グリーンは不機嫌な声で囁いた。

「なんだよ。怖くなったのか？ いやいきなり連れてきちまって悪いとは思ってるけど……」

「そうじゃないって。見て」

レッドが指差した先を、グリーンも見る。指差した先には、ごく細い糸が張ってあった。光の当たり具合によっては全く見えないほど細い。

「何か分からないけど、あの人もここを通る時ちょっと大きくまたいでた。きつと踏まない方がいい」

「おお、マジか。良く見てるな」

「たまたまだよ」

謙遜ではなく真実だったが、グリーンはニヤリと頬を歪める。

「そう言うことにおいてやるよ。じゃあこの先も気をつけていこうか。またこんなのがもあるかも知れないし。頼りにしてるぜレッド」

「たまたまなんだけどなあ……」

レッドはぶつぶつ言いつつグリーンの後に続いた。



ロミアスが通った場所は割と分かり易かったが、木々に覆われた山道は険しく、道なき道を進む二人はすぐに汗まみれになった。上手く根の上を歩けた時はいいが、乾いていない土を踏んだ時は足が沈み込み、靴に泥という重りが付いてくる。グリーンも苦しそうだ。笑いそうになる膝を叱咤しつつ、なぜグリーンがここまで執拗に犯人を追うのか、少し気になった。

「そんなに思い入れのあるジムじゃなかったんだ」

尋ねて見ると、案外簡単にグリーンは喋り出した。

「クチバシテイってパツとしないだろ。タمامシシテイやグレン島みたいに特色があるわけでもないし。でもさ、ここセキエイ高原に一番近いから、俺、全部のバツジ集めてからここで最後のバツジとってチャンピオンロードに挑もうと思ったんだよ。なんか勢いに乗れる気がするだろ？」

チャンピオンロードがあるセキエイ高原に一番近い街は確かにここだ。レッドはうなずき、先を促した。

「そう思うとさ、この無駄に立派なジムとかが特別に思えて、来た日は2時間くらい眺めてたんだよな。ヒトカゲが腹減ったって鳴かなかつたらもつと見てたかも。だけど今朝起きたら燃えてて、つまり、俺かなり腹が立ってんだよ」

要領を得ない喋り方で、最後のところだけ言えばいいのにダラダラと話されて理解に時間がかかったが、まあ、思っていることは伝わった。

「追いついて、どうするの？」

「分かんねえ。でも、なんで燃やしたか聞きたいかな」

やがて行く手に洞窟が見えてきた。入口に足跡が入って行っている。グリーンと顔を見合わせ、互いに頷いてゆっくりと中に侵入した。

洞窟の中は暗く、明りがなければ相当危険そうだったが、今は別だ。バトル空間の緑色の光で照らしだされたそこではバトルが行われていた。レッドとグリーンはサッと入口近くの岩陰に身を隠す。

見覚えのある水色髪の女の人とロミアスに、一人の男が対峙している。濃紺の髪をした端正な顔つきの体の細い男だ。タッグバトルのように見えるが、一人一体しかモンスターを出していない。状況がつかめなかった。

男が呟く。

「ウンガガ、『ほのおのパンチ』！」
「ブオオオオオオオオオオッ！」

牛の顔をした二メートル半はある大きなモンスターが、咆哮する。同時に右腕から炎が発生し、白熱した。周囲が陽炎で揺らめくほどだ。

牛男は雄たけびとともに炎を纏った腕を振り上げロミアスのモンスターへ叩きつける。熱気が渦巻き、赤黒い牛人間の体が残像を残すような速度で動いた。

しかし攻撃はロミアスのモンスター、ストライクの体を素通りして、地面を砕いただけだった。陥没し熱された地面が硝子のように結晶化する。良く見れば、ストライクの体が三つある。そのうち二つ

が幻影だともいうのだろうか。

「『かげぶんしん』は厄介ですね……」

「ミノタウロスの攻撃など、まともに受けてなどいられないからな。ストライク、『つばさでうつ』だ！」

ヒイン、と羽を震わせストライクがふわりと舞い上がる。次の瞬間、ミノタウロスの体から耳が張り裂けそうな破裂音がし、ミノタウロスが壁へと叩きつけられる。高さ4メートルはあるかという壁の上から下まで亀裂が走った。

「ヤドラン、『サイコキネシス』」

追い打ちをかけるように、女の人が低く言う。彼女の前にのぼーと立っていたヤドランが、腕を上げた。

指先の空間がぐしゃりと歪み、ミノタウロスが叫びつつ顔を抑える。指の間、目と耳と口から血が噴き出し、ミノタウロスは地面へ倒れ伏す。その体が薄れるように消え去った。

バトル終了とみなされたのかバトル空間が消滅していく。

男が舌を打ち、懐から緑色の紙を丸めた物を取り出した。巻物のようだ。

「口惜しいですが、二対一では仕方ありませんね。出直しです」

「レポートの巻物だと!？」

「……次は必ずあなた方を連れもどしますからね」

「私たちは話し合いたいただけなのだけど」

「話し合いの余地はありません。あなた方は罪人です。弁解は森に戻ってから首長にどうぞ」

「断るわ」

「でしょうね」

男は皮肉気にそう言うと、広げた巻物へ噛み千切った指先を走らせ、血で線を引く。巻物が眩く発光し、男の体が掻き消えた。

ロミアスがおいおい、と呟く。

「あいつ、金を払わずに逃げたぞ……」

「もう、そんなことはどうでもいいわロミアス。それより……誰かに見られてるわ」

女の視線がヒタリと張り付くようにこちらを見る。

「！」

体がびくりと跳ねるようだった。レッドの肩を上から押さえつける物がある。グリーンの手だ。僅かに震えるその手から、彼の決意が伝わってくる。

（何をするつもり！？）

しかしレッドはどうすればいいのか分からない。グリーンがすうと息を吸い、飛びだそうとする。それを制するように、女の人が呟いた。

「アイテムがないから口封じは難しいわね。ロミアス、逃げましょう」

「ケガはもう大丈夫か？ それに……何も言わなければ恐らく誤解されるだろう」

「……どちらが正しいのかなんて、分からないわ。何が誤解かも、ね。それより、私たちにはあまり時間がないわ」

「そうか」

一つ頷き、ロミアスはストライクを仕舞って新しいモンスターを呼びだした。レッドも見ただことのあるモンスター、プチだ。ただ、体の色は赤く、白い大きな羽が生えている。進化先だろうか。

ふわりと浮きあがるプチに、ロミアスがするりと縄をかけ、女の人と共にその縄につかまった。

「羽プチ、『そらをとぶ』だ」
「ミ、っ！」

可愛らしい鳴き声と共にプチが羽ばたくと周りの空気が渦を巻き、こらえきらずに目をそらす。

岩に隠れるグリーンとレッドの上を、高速で何かが通り過ぎ、洞窟の外へと逃れていった。

「ま、まてえ！」

グリーンが完全に遅れたタイミングで叫ぶと、洞窟内に、まてー、まてーと反響するばかりで、当たり前だが返事は帰ってこない。切なさが溢れる彼の背中をとりあえずレッドは慰めた。

「ま、まあそんなこともあるよ。グリーンは頑張ったさ。ドンマイ」
「う、うるせえー！」

グリーンは恥ずかしそうに叫んだ。

街に戻る途中、緊張から解放された反動かグリーンは喋りとおし
だった。

「いや、火事のことを聞けなかったのは残念だけだよ。なんか俺、
やる気が湧いてきた。だってあの人たちが使ってるの知らないモン
スターばかりでさ。技もすげえ強いし、なんかワクワクしてきた
ぜ！ レッドもそう思うだろ！？」

「うん、まあね。羽プチとかどう見ても羽スライムのパクリだった
けど」

「スライム！？ あんな酸で溶かしてくるようなグロい奴らとプチ
を一緒にスンなよ！」

「え、ええー…」

意味不明なんですけど。ここのスライムって酸をはくの？

困惑するレッドの前を歩きながらグリーンは洞窟の中のことを思
い出して興奮しているようだった。

確かに、上級者の戦闘が見えたのは良いことかもしれない。ここ
に来る前、少女のジハードが二人の去った後をじっと見ていたのは
彼らの強さを感じ取ったのかもしれないなあ、とレッドは思った。

「それにしてもよ」

山を下りたくらいで、グリーンが切り出した。靴の裏に着いた泥
を木の枝でこそぎ落しながら、靴を軽くしようとしている。レッド
のシューズも裏や横に土がひつついてかなり重かった。

「なんか罪人とか言ってたけど、何だったんだろうな」

「さあ、ね。火事に関係あるのかな」

「普通に考えたらそうなるけど、俺、そうは思わないね」

グリーンは枝を放り捨てながらこちらを見た。空はもう夕焼けが沈もうとしており、グリーンがなんかイケメンに見える。もともとか。

「俺風が吹いたときに見たんだけど、あの人たち耳が尖ってた。エレアだよ。もしかしてロケット団の奴らかも」

「ほう…」

まったく分からん。耳が尖ってた↓エレア↓ロケット団という論理構造全てが分からない。ロケット団以外の言葉の意味も不明だ。あとでメッセーじさんに聞かざるを得ない。

「ロケット団が関わってるとなると、一気にきな臭くなるなあ」

「そうだね」

その後も魔法の言葉、「そうだね」を連発して何を逃れようとしたレッドだが、いつの間にか明日の朝に、ポケモンバトルをするこ
とになっていた。

「よし、朝十時な。遅れんなよ!」

「そうだ…何だと!？」

「あー、今日は疲れたなー。なんか旨い物食べてゆっくりするかー」

グリーンはすでに夕食のことで頭がいっぱいのようなのだ。ちよつと
そのところk w s k! と叫びたい気分だったが、まあいいか、
と思い直す。

今日のバトルを見て、感化されたのはグリーンだけではない。レッドもポケモンの可能性を感じて大いに興奮しているのだ。

確かにこれはバトルでもしなければ治まりそうにない。その相手として戦うのがグリーンなら、望むところである。

「相手として不足なし、だね」

屋台のおじさんが、何言っただこのガキ、みたいな視線で見ていることに気づき、レッドは慌てて、キリッとしていた顔を直し、そそくさとポケモンセンターへ歩き始めたのだった。

第六話 ウンガガは死んだ（後書き）

お気に入りを入れて下さっている方、ありがとうございます。
マイナー作家ですが、頑張らせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1233y/>

Elona×ポケモン（改訂版）

2011年11月4日13時18分発行